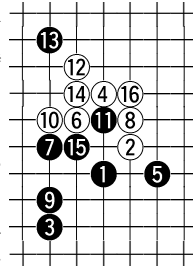


# 彗星ガイド (8)

九段 河村典彦

今回も前回の白4に対する黒5の残りから。

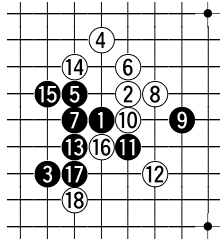
第70図



で三々勝ちとなる。四ノビで防いでも効果がない。

【第71図】この黒5が成立すると、黒も楽なのだが、やはりうまくいかない。呼手になっていないので、白6とまともに密集する手がある。黒7は精一杯頑張った手なのだが、

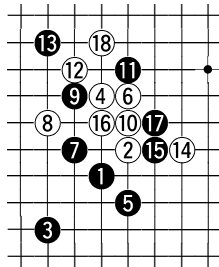
第71図



白16がびつたりとの反撃となる。黒17で一旦止められるが、まだ四追が残っている。

これでこの白4に対し黒5を11か所調べたことになるが、まだ行

第72図



こう。

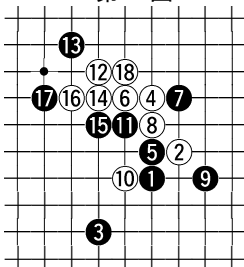
【第72図】この黒5もついでに調べておこう。白はやはり白6と構

える。黒7と一本引いてから黒9はこう防ぐところだろうか。白10、12と引いて、筋がいろいろ抜けてそうだ。それを実現するのが白14。黒15と焦点を止めれば、白16、18と打って白勝ちとなる。

たくなる。あと2図お付き合いいただこう。

【第73図】この黒5は良く考えられる呼手となっている。なので白も油断がならない。ただし、彗星では白4から近い場所にあるだけに、なかなかうまくいかない場合が多い。ここでは白6と構えるのが良

第73図

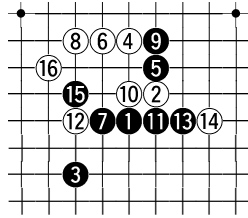


いだろう。黒は8と防ぐと白7から簡単に白勝ちになってしまうので、黒7と止めざるを得ない。白8と引いて、白10と止めておけば、黒3の石が参加する展開にはならない。

黒11と止めるしかないが、白12、14とさらに構え、黒15の止めに白16、18と密集すればこれで黒は手も足も出ない。やはりこの黒5はなかなかうまくいかない。

【第74図】最後に黒5と絡んでいく手を調べてみよう。黒5までは「逆溪月」とも言える形で、ここで白の手番だから白が悪い理屈はない。後は勝てるかどうかだ。結論を言えば、白が勝てそうだ。

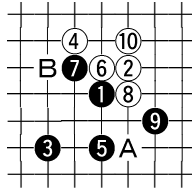
第74図



攻め方であるのは間違いない。

白6は黒のけん制手を「けん制」した一手で、それでも黒は7とけん制する。白8とこちらに引くのが白の狙いで、黒9に白10と打って、自然に黒7でできた勢力を弱めている。黒11には白12と逆止めし、遂に黒は15と防ぎに来ざるを得なくなる。白は16と外からかぶせてこれはもう黒に防ぎがないだろう。結局、黒3の石を使わせないので白の

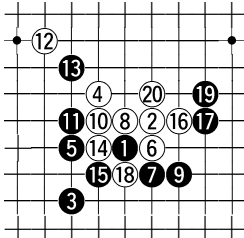
第75図



【第75図】ようやく次の白4に移ることができる。この白4は先ほどの白4と桂馬の位置にあるのは同じだが、強さが全然違う。この白4には黒5は一題しか打てなさそうだからである。例えばこれまで常識であった黒5であるが、白6と打たれるとこの形が妙に強力で、黒は困る。黒7なら白8から10だ。また、黒5をAなら白Bとけん制する。

【第76図】また、こちらの黒5も通常は打てるが、白6と打つ手があつて容易ではない。黒7と止めても白8、10と引き、黒11の時に白12と長連筋にするのが白の自慢。こうしておけば、白14から続けて攻撃できる。白20まで打たれては白の完勝となる。

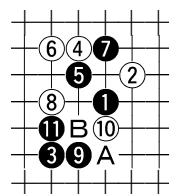
第76図



では、正着の黒5はいったいどこだろう？実は次の図の黒5しかかない。この5は絡んでいく系なので、そもそも混戦形

になる。

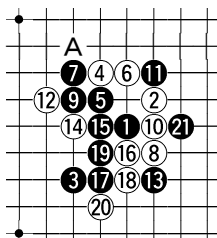
第77図



要となる。

【第77図】この黒5は呼手ではないので、防ぎ切る覚悟がいる。白6からは自然だが、これなら黒9に先着できるので黒の要望が通った形になる。白10と防ぎにきて、黒11と組んでおいてこれは黒が打ちやすいだろう。白10がAなら当然黒はBだ。白も序盤から工夫しないと、黒3の石を利用される手を打たれてしまうので細心の注意が必要となる。

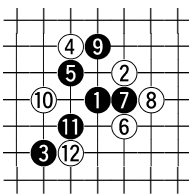
第78図



うので要注意。

【第78図】白は6と黒の連を無視して攻める方が強い。当然黒は7から9と組むが、白10から白12と止めておくのがこれまた強い。黒は打ちたい所が三々禁となるので、なかなか攻めが難しい。結局、黒15から21まで処理するぐらいが相場で、これですっきり混戦となる。また、勢い余つてうっかり白12でAまで打つてしまうと黒勝ちになってしまう

第79図



【第79図】白6は防ぎを重視した着手で、こうやってじっくり打つのもある。以下黒7から白10までは妥当な展開だが、黒11で黒3の石とつながるのが白としては気に入らない。ただ、白12と急所に打つておけば、黒3の石もさほど気にならないかもしれない。

次回は白6の変化について調べてみよう。